
魔女と僕と魔女

太陽サン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と僕と魔女

【Zコード】

N4265BA

【作者名】

太陽サン

【あらすじ】

東京の真ん中、大都會にある塔で少年が魔女を目指す話です。

魔女への一步

東京、大都会の上空で僕は落ちた。

飛行船から都会のビル群へ。誰かに落とされた氣もするが忘れた。
そんなことより僕にとって、人生を決める大切なことがおきた。

『ガシツ』

上空で落ちる、僕の手を誰かがとつた。
それは、大きな白い翼を生やした人。
夕焼けに映るその白い美しい姿はまるで。

「天使・・・」

僕はそうつぶやいた。

「ぶーぶーはずれ！あたしは魔女だよ。」

彼女は陽気に、笑いながらそう言つた。

僕はあのとき、あの瞬間決めたんだ。

魔女になるつて。

彼女のような魔女に。

10年後

2017年東京

大都会東京の、ど真ん中に大きな塔があつた。

それは、全長一万メートルの窓もないの飾りつ氣もない殺風景な塔であつた。

50年前まで、大東京タワーと呼ばれていたその場所だ。
その高い高い塔の足元に、一人の少年は立つていた。
塔を見上げるようにして、少年は塔を見て感動していくようだつた。

「俺はここで・・・魔女になつてみせる。」

そう静かに力強く、少年はつぶやいた。

50年前までこの一万メートルの窓もない飾りつ氣もない殺風景な塔の、巨大な塔の扉が開かれた。

それは歴史上初めてのことである。

いや、人間の歴史上初めてのことである。

人間が存在する前の歴史には、この塔の扉は開いていたのかもしない。

ようは、この塔は人間が存在する前からあつたモノなのである。それは、歴史上のあらゆる文献と。それを研究した歴史家によつて証明されている。

『死の塔』

『まやかしの塔』

『神の塔』

『大東京タワー』

さまざまな時代で、さまざまな呼ば方してきた。そしていまの名称は、魔女学校。

魔女を育成するための、専門機関である。

この塔が、魔女学校と呼ばれるようになつた経緯は、この塔の扉が初めて開いた50年前にさかのぼる。

それまで、この塔は不可侵にして絶対硬度を誇り、扉を開けることも塔を破壊することもできなかつた。

そして、東京のド真ん中に。絶対的な塔として君臨していた。

だがある日、その塔の扉が開いたのだ。音もなく予兆もなくただ平然と、全長300メートルの塔の扉がひとりでに。

戦後日本は、疲弊していた。

だがその話題は日本中。いや世界中を駆け巡り、観光の目玉として連日数百万単位の観光客が、塔のまわりに押し寄せていた。

だが、誰も扉の奥に誰も入らなかつた、いや入れなかつたのだ。

だ。扉がまた閉まつたのではない。扉が開いているのに入れなかつたの

まるで扉が開いた場所に、もう一枚の見えない分厚い扉が存在するかのように。

その見えない扉も不可侵にして破壊することもできなかつた。

見えないのだから、当然のことだから、
そして、人々は、塔への侵入あきらめ。興味も徐々に薄れていった。

そして、それから半年がたち。

この塔の扉が開いているのかめでたくもなくあたりまえで見なれた光景になつた頃。扉にある言葉が映しだされた。

それは、以前の開かずの扉にではなく、いま存在しているが、存在するはずのない、見えない扉のようである。

その文字は、宙に浮くように、白く発光して映しだされていた。

『この扉の先に入れる者は、魔力をもつ者だけである。

を。『

それ以来ここは、魔女学校と呼ばれた。

そして時は流れ。
2017年東京。

現在、魔女学校は、通称魔女学と呼ばれ。この世界にもつとも重要な場所として存在していた。そして、この全長1万メートルの、塔の足元に、一人の少年はいた。少年は、塔にあることをしていた。

んーんーん！

はるか50年以前に、人々がしていたことだ。

アーチーの壁の端に立つ

「元氣」

無理やり開けよとすむことだ。

少年は力いっぱい、金長300メートルの扉を、無理やりじに開けようとしていた。

「んが――――――！」

少年は、120%の力を込めた。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

ダメだった。

「はあはあやつぱり開かない・・・俺には魔力はあるはずなのに・・・変だなあ～噂では、魔力があれば開けられるはずなのに。」
ふいに後ろから。

「それは、違うわ

「！」

声をかけられた。女性の声だ。振りかえるとそこには、
真面目でやさしそうな少女と、おとなしくどこか気弱そうな、二人
の少女が立っていた。

（めずらしい制服だ。どこかでみたことがある・・・たしか・・・
なにのかパンフレットで見たような・・・・・そうかー魔女学の制服
！といことは、このふたりはここの中学生で魔女見習い？）
真面目でやさしそうな少女は、俺の田のまで歩いてくると、そこを
こ膨らみ

のある胸に手をおき、自己紹介をしてきた。

「樹よ、かんばら神原いづき樹、そしてこの子は藍原凜、樹達はここの中学生なの、
あなたは誰？どうして扉を開けようとしてたの？」
すこし答えるのを迷つたが、すぐに答えた。

「お・・俺は黒羊 祭です。開けようとしていた理由は・・・」

「黒羊！」

急に、樹さんが驚いた顔をした。

「あの・・・どうしたんですか？」

樹と名乗る少女は、あきらかに少し動搖していたが。すぐに、平静
を取り戻し。

「ううん・・・めんなさい。なんでもないわ、ちょっと知つてている

苗字だつたから。」

「そうですか？」

「それで？あなたはどうしてこの扉を開けたいのかな？興味本意かな・・

それとも力試し？もしかして不法侵入が目的かしら、ふふ」

「違います！俺は魔女になりたいんです！」

俺は堂々とキッパリ答えた、いつもどつり。

「魔女に？」

「はい！」

俺は、バカにされることを覚悟した。当然だろう？
男が魔女を目指そうとしているのだ、それは仕方ないことだ。
傷つぐが、俺はその、悔しさをバネに、余計にその夢を叶えるため努力した。

（たしかに、世間から見れば、馬鹿なことなのかもしない・・・
でも、きっと、叶えた時に誰もが、認めてくれるとそう信じている。
）

現に、一人いてくれたのだから。

俺を育ててくれた、ばつちゃんは。

「嘘をつきなさい。そうしないと友達ができないわよ」

そう言った。

実際、友達は今まで一人しかできなかつた。
それでも、そのたつた一人の友達は、理解してくれた。認めてくれた。

俺に、きっとなれると黙つてくれた。

それは、俺にとつてなによりも救いになつてゐる。

自分の夢を言葉だけでも、捻じ曲げれば、きっと傷つかずもつと友達できたかもしれない。

そうかもしれない。その通りだ。

それが正しい選択なのかもしれない。

だが、俺は曲げたくなかつた。

夢だけは。

俺の信じた夢を、友達が信じてくれた夢を、『ごまかしたくなかったから。

それにもし、ばっちゃんが言つよつて、魔女を目指すという夢を、誰に語らず秘密の夢と/or>ていたら、あのかけがいようのない友人はできなかつたかもしれない。それは絶対やだ。

この真面目で、やさしそうな神原樹さんは、どう思うのだろう。後ろの藍原凜さんは、びっくりした顔をしてる、たぶんあまりいい感情をもたれていないだろう。

自分勝手な考えかもしないけど、俺はこの学校で魔女を目指すうえで、一人くらい俺の夢を理解してくれる友人がほしかつた。友人ではなくても奇異の目でみないそんな人を

「そつか祭君・・男の子がなのに魔女になりたいのかー」

「はい変ですか?」

「いいえ、変じやないわ。がんばつてー男の子とか関係ない・・夢を信じればきっとなれるわ。」

そう言つて彼女は、やさしくほほ笑んだ。

嬉しかつた、バカな夢かもしれない。でも大切な夢を、彼女は応援してくるとまで言つてくれた。涙が目に溜まるほど、うれしかつた。二人目が現れたのだ。

「ありがとうございます!」

俺は嬉しさのあまり、全力でお辞儀した。

「えつ?・・・あつ・・・はい・・・」

彼女はすこし困惑した顔で、俺からの一方的な、うれしさをその身に受けた。

そして彼女は、少し考えるよつた姿勢をとり、一言。

「しつてるかな？」

「え？ 何をですか？」

「この言葉を・・・」

『この扉の先に入れる者は、魔力をもつ者だけである。この先に進めた者には、英知を与える。魔法という名の禁断の英知を。』

「それはたしか50年前の・・・」

「そうよ、50年前に、この扉を開けたあとにある見えない扉に書かれていた一文よ。」

「たしか、それから数カ月後ですよね？ ここが魔女学校と呼ばれるようになつたのは？」

「そう・・・初めはこの扉は、常時開きっぱなしになつていたらしいの。そして魔力を持ち、塔の中に入る者すべてに、魔法を教えていたらしいわ。」

『スツ』

つと樹さんは、俺の頬に両手に手をあて、目をつぶつた。

（まさかキス！？）

すると、隣にいた藍原さんが慌てて言つ。

「キスじゃないからね！ 樹ちゃんは、あなたに魔力があるかどうか、探つてているだけだからね！ 勘違いしないでね！」

隣にいる藍原さんにすごい剣幕で怒られた。

ものすごい敵愾心むき出しで言われた。

（すいません、勘違いしてました。）

「感じるわ、あなたから・・・」

「えつ！」

「魔力を・・・・・」

「嘘、そんな・・・男の人は魔力を持つてないはず。ありえないよ

」

俺は今まで、魔力があることに、なにも疑問もなく生きていたから、男が魔力をもつてているのがそんなめずらしいことだとは思わなかつた。

（男が持つてているのは、そんなにありえないことなのか？）
うん！これであなたにはこの塔に入れる条件を満たしていることがわかつたわ

あなたには魔女になれる資格があるわ

「でも男だよ・・・樹ちゃん」

男とか女とか関係ないわ。

「でも・・・他の人がなんていうか。」

目を伏せながら藍原さんがそう言つ。

「凛、あなたは他人の目を気にしそぎよ」
「・・・・・・わ・・わたしは・・」

やさしい口調で。

「人はね、誰かのために生きてるんじゃない、自分のために生きているの。だから、他人がどうとか関係ない、自分がどうかなのよ・・

・でも人は、一人では生きていけない。だから樹たちは友達なの・・

「樹ちゃん・・・」

強い口調で。

「でも一人で乗り越えなくちゃいけないこともある。でも一人じゃない・・

あなたがもし、自分の殻を出たいときは、相談して・・・。一人で抱えないで。

悩みが違う以上、一緒に乗りこえることはできないわ・・でも乗り越える手助けくらいはできる・・だつて私たち一生の友達でしょ？」

「うん・・うん・・ありがと! 樹ちゃん・・・」

涙に顔を濡らしながら、藍原さんはうなずく。

「あんたのためなら、どんなことでもするわ。」

そう彼女を抱きかかえながら、頭を撫でてあげている。

そしてこちらを見て。

「あなたもよ、祭くん。もしなにがあつたら、樹に相談して。なんでものるわよ、もしあなたに、魔女になる資格がないという人がいれば、樹がその人にわからせてあげる。もちろん力すぐじやないわよ、ふふ、言葉でね。」

うれしかつた、自分のことをわかつて認めてくれた。今までこんなに認めてくれたのは、2年前に別れた幼馴染いらいだ。

樹さんはまじうことなき、正義の味方気質だ。この人は、たぶん誰にでもやさしいのだろう。誰にでも味方するのだろう。

きっと悪にやえ。

この人は、どんな悪にも、罪を憎んで人を憎まずを体現するだろう。どんな悪だろうと許し。

助けを求められれば、時と場合によつては助ける。

正真正銘の正義の味方。

かつて、漫画やアニメであこがれた、あのヒーローを彷彿させる。「樹さんってなんか、正義の味方みたいですね?」

樹さんは驚いて顔で

「え? 正義の味方? どうしてそう思つの?」

「えつと・・・あの? なにか気を悪くしましたか?」

俺は、心配になり尋ねる。

「いや・・・あははちよつと・・・じゃなくて、かなり嬉しくて・・・

・

「うれしい?」

「実はね・・・樹の夢は、正義の味方になることなのー。」

「え！」

「この夢はね、人あまり理解されないの・・・子供っぽいとか、かっこつけとかよく言われるわ。そんなことは気にしないつもりだけど、やっぱりいわれればちょっと傷つくわ・・・」

「・・・」

「いいの・・・そとかしれないことは、わかるわ。でも樹にはね・・・ずつとなりたくて、あこがれて人がいるの。その人みたいに、悪から人を守り！その悪さえ許し、更生させる！そんな正義の味方になろうって、子供の時からずっと決めてるのー。」

だから、樹が目指す夢を、あなたに言い当てられたことが、とつてもうれしいかったの・・・だって

そうでしょ？自分の夢を理解してくれる・・・共感してくれる・・・これほどのうれしいことが、この世の中にあるのかじり？

「わかりますその気持ち！」

メチャクチャ共感した。

「・・・」（私のほうが、樹ちゃんのことずっと前から、ずっとと深く理解してるもん。）

「樹は貫き通すわ！どんなに笑われても、傷ついても、理解されなくても・・・この夢だけわねー！」

（本物だ！彼女の信念は本物だ。）

俺も、夢に関しては誰かに負ける気はないけど。

彼女の意志の強さを、まじかで見ていると圧倒される。

夢という個人個人がちがう、曖昧で大切な物で争うつもりはないけど。

それでも彼女に思いに激しく感化される、心の奥底で負けたくないと思う自分もいた。

「夢のため、お互いがんばりましょう樹さんー。」

「ええ祭君ー！」

お互い手を取り誓い合つた。それはまるでアニメやドラマの理想のライバルシーンを描いた、ワンシーンにさえ思わせる。

理想のライバルそれは、たがいに感化し影響し伸ばしあう、人の繋がりで人は、強くなるものなのだ。

（これが魔女を口指すつてことか・・・）

実際、ライバルという無縁な人生を送つてきた彼には、こういう関係はフイクションであり、現実のこの世界ではないものとどこか思つていた。だからこそ嬉しかつた、ありもしないあこがれた関係がいま築かれたのだから。

はいはいはいはいはいはいはいはい

いきなり、奇声をあげ藍原さんが、俺達の間に割つて入つた
「わたしもわたしもーめざす——！」

最初の印象では、おとなしく嬌弱そうな女の子、それが藍原さんく
の俺の第一印象だ。

だが顔を赤くして、両手をあげながら奇声に近い声で叫ぶ。彼女を見ていると、俺の最初の印象はどうやら間違いだつたようだ、訂正しないと。

「私も、樹ちゃんみたいに正義の味方になる。私ね！わたしね！樹ちゃんのためならなんでもするの！だから私のことも、頼りにしてね・・樹ちゃん」

「ありがとつ凜」
そして藍原さんは、弱よわしげだが、じりじりをキッヒリとこだわった
敵愾心むき出しである。

「あはは（汗）」

（なにか、ちがう意味でのライバルと思われる感じだな～あなたには負けないぞ！そんな気合いを感じる。）

そんな藍原さん、震わせやがって。

「……………」凛……………やきもち焼かない。

心の内を読まれて恥ずかしいのか、藍原さんは真っ赤になつて涙目

になつて反応した。

そんな藍原さんを今度は、諭すように凛さんは。

「一番大事な友達はあなたなのよ。」

「はうつ（かあああ）」

「ずっと側にいてくれた。だからこれからもずっと側にいてもらいつわ。誰よりもあなたを信頼してる。ずっとずっと一人でがんばろう（一ノ口）」

「うんうんうんうんうーん」

藍原さんはすゞくうれしそうだ。

（この一人からは、友人以上の繋がりを感じる。）

それは、一緒に夢を目指すという、友人同士の語りであつたが。だが藍原凜は、夢を目指すというより、好きな友達の真似をしているだけにすぎないように感じる。

本当に正義の味方になりたいかも不明だ。だがそれも、一つの夢の形である。

『大切な誰かの真似をしたい。』

『あこがれる誰かみたいになりたい。』

こういう過程があつてこそ、黒羊祭や神原樹の、今があつたのかもしれない。

夢の初めは、どんな入り方でもいい、ようはそれを、最終的に自分の夢として、確固たるモノにできるかどうかだろう。たとえできなくとも、好きな友人の真似だけだとしても、それをだれが非難できようか。

所詮、人は一人で生きられない。誰かを求めてします。

『繋がり』

人がそれを得ようとするのは、必然であり欲求であり、義務なのだ。神原樹は、それはわかっているのだろう。

ただ、無二の親友を、かけがいのない友達を頬笑み、受け入れていた。

その友人同士の、ほほへましい繋がりを見て。黒羊祭はいまはいな

い、手紙と電話だけのやつ取りの幼馴染のいじを思い出した。

魔女になつたら、きっとまた会いにいづ。

きっと胸を張つて、あの時の約束を守れるから。

そう、彼が思い出に浸つてゐる時。

「祭君。」

樹さんが、話かけてきた。

「……は……はいなんでしょう。」

「残念だけど、あなたは魔女にはなれないわ。」

「ま……魔女になれないって……どういうことですか？」

「ごめんさい、さつきあなたには、魔女になれる資格はあるつてい

たけど、なれない理由があることを、ド忘れしていたわ。」

「しかたないよ……樹ちゃん、男の人がいきなり魔女になりたい
なんて、言つてきたんだから……魔女になるための、もうひとつ
の条件をド忘れしていくも。」

「もうひとつ条件……そ……それは、一体なんなんですか？」

樹さんは、申し訳けなさそうに。

「……昔はね、この魔女学への入学条件は、魔力を持つてゐ
ことだけだったの。

いついかなる時期でも、この塔に入れさえすれば、いつでも入学で
きたわ……でも今は違う。

昔は常に開けばっなしになつていて、この扉も、この生徒しか開
けられない。

そして、この魔女学で、魔法を教わることのできる者は、1年に1
度……3月3日、この扉の開放日にこの塔に入れた者だけなのよ。
残念だけど今日は、5月10日。ここに入学して、魔女見習いにな
りたいのなら、来年の3月3日まで、まで待つ必要があるわ。
それから魔女を目指しても遅くないんじやないかな？

「……でも俺は……いきます魔女になりたいんです！」

「…………気持ちはわかるけど……」

「やつと……沖縄から、旅費をためて東京にきたんです！
ここで魔女をあきらめたら、またいつここに来れるかわかりません。
だからオレは、今日しますぐ、この魔女学に入学できるよつ、ここ
の学園長に直談判してきます。」

「…………」

樹さんは感心したよつ」。

「すゞいわね……勇氣があるわ、さすがだわ祭君。」

「そ・・・そうですか・・・」

すこし照れくわい。

「ええ・・あの学園長に直談判だなんて・・・」

「あの学園長・・・」

「超有名だから知らない訳じやないでしょ？ 塵では学園長は、何千
年も生きている不老不死らしいの
え？」

「この魔女学は、50年以上前まで大東京タワーといわれる場所だ
ったわ。開かず壊せず、ただ存在するだけの塔だつた。その頃から
この中にいたといつ噂よ学園長。」

「！？」

「魔女学校学園長メフェス ヴアンパイア・・・

彼女は、50年前からここで魔法を教えている。

いまでは先生職は卒業生の生徒にまかせいるけど、それからいま
でずつとこの塔で、学園長として容姿は一切変わらず存在し続けて
いる。

みんながこぞつて噂したわ、学園長は不死ではないかと、この扉が
開く前から、この塔の中にいたんじやないか？

実はこの塔に封印されている化け物で、人間を墮落させるため、魔
法という禁断の果実をもつててきた悪魔じやないかつて、いろいろね

「・・・・（ぶるつ）」

「この塔は、人が存在する前からあつた、もしかしたらここを作つ

たのも彼女で、ずっとこの塔の中に生き続けているのかもしれない。
・・授業は先生だけだし、樹はまだちゃんと一度も見たことはない
から、確信はないけど・・・

「・・・・・」

「い・・・樹ちゃん!」

「!」

「・・・・・大丈夫? 祭君?」

「へ?」

「・・・顔が青いわよ・・?」

樹さんは、心配そうに、顔を覗き込むように見つめてきた。

「もしかしていまの話・・・全然しらなかつた?」

俺は慌てて。

「ち・・違います! 知つてました。これは侍者青いです!」

（武者青いつて何! それをいうなら武者ぶるいだ!）

「()・・・・ごめんなさい知らなかつたみたいね。 (しょぼーん)」

演技は、バレバレだつたらしい。恥ずかしい。

「樹のせいで・・・怖がらせちやつたみたいね (しょぼぼーん)」

樹さんは、本当に申し訳なさそうだ。

「い・・いえ・・へつちらです。これから歴史上初の、男が魔女
を目指すんですから。

倒してみせますよ、学園長を!」

「えええ!?

「ま・・祭君! 祭君! 倒しちゃダメよ! ダメよ! 学園長なんだから

! (汗)」

「あつ・・・・そ・・・そうでした・・すいません」

情けないことに、かなり動搖してしまつているらし!。

（不老不死・・・化け物・・・そんな相手に直談判・・・・・

でも・・・知らないより知つていたほうがいいはず。交渉する上で、
相手のことを知らないより、知つていたほうが、断然有利にことを
運べるだろう。）

なら、相手が相手だけに、それだけの気概と気合が必要だわ。俺はあらためて、自分に渴をいれる。

『渴!』

その心境とは裏腹に、顔はまだ青かった。

「祭君・・・」

「!」

彼女は俺に近づき、震える俺の手をとった。

「樹さん?」

「・・・・・樹ちゃん・・・まさか!?」

そして俺の手のひらに、指で人の字を書くと、それを。

『ペロ』

「! ! ! ! ?」

(舐めたあああああ! ! ! ?)

「お母さんがね・・・よくやつてくれたの樹に、こうやつて手のひらに人を書いて舐めると、緊張がほぐれるって」

(樹ちゃん! それは自分で舐めるものだから! わたしもやられて、嬉しかつたけど!)

俺は。

(女の子に初めて、手のひらを舐めた・・・)

あまりの衝撃に、さきほどの恐怖はすべて吹き飛んでいた。

「いいいいいい・・・樹ちゃん! 汚いよ! 舐めたら!」

「あつそうね! 」・「めんなさい! 祭君・・・いきなり手を舐めてしまって、汚かつたでしょ? 」

「や・・そうじゃないよ」

藍原さんは、慌てて急いで、樹に自分のハンカチを差し出した。

「ありがとう凜! 」

それを。

「はい、コレを使って祭君

俺に渡した。

「…そつちじやないよ…樹ちやん…」

「え?」

「あ・・あの、いこですかから・・氣にしてませんから
「そつ・・・」めなれ。あなたが・・死んだ母に似ていたから、
ついね」

(容姿だらうか? それとも雰囲氣?)

「いえ・・・俺、勇氣出ました。頑張ります」
今度は、心の底からうつ語えた。

「よかつた」

「樹ちやん!」

「ん? 何?」

「そろそろ時間だよ・・・授業遅刻しちゃう」

「あ・・やうね・・・もつこんな時間…」

樹さんは、時間を携帯で確認した。

「いめんせこ祭君、いんな所で長々と立ち話じて」

「いえ」

「じやあ樹達はこくわね、扉は開けておくから、がんばってね

「はい!」

そう言つと樹ちゃんは、閉じた扉の前にこくと、スッヒ手を、やれこく触れた。

すると、300メートルはある、開かずの扉は、音もなく容易に開いた。

その静けさに、まるでこままですと開いていたかのよつな、雰囲気さえ感じた。

「樹さん?あの・・・扉はびつすれば閉まるんですか?」

「ん・・2、3分もすれば勝手に閉まるわ」

「そつですか。ありがとうございます。」

「また会こましよう祭君・・・教室で」

「はい樹さん」

そうして彼女たちは、塔の中に入つていった。

・・・・・パン

「・・・・・よしーいくぞ!」

顔を叩き、俺は気合いをいれる。

(たしか・・・扉が開いた先にも、見えない扉があつて、それは魔力があれば入れるはずだと・・・魔力がなければ入ることはできないのか・・・俺は、もう魔法も使えるし、絶対入れるに決まっているけど・・・すこし不安だ・・・でも・・・)

そんな不安より、彼の心にいま、渦巻くのは。

「・・・とうとう・・・ここから始めるんだ・・・俺の魔女への第一歩が・・・」

そう期待と決意を胸に、塔の内側に足を一步、踏み入れたその時。

『ビ
ビ
ビ』

けたたましい警報音が鳴り響いた。

『侵入者侵入者侵入者!』

『直チニコノ塔ヲデナサイ!』

(えーーーーー? 一步目でこれ! ! ! ?)

『引キ帰シナサイ!』

(引き返せるか!)

さらに一步、歩を進めた。

『警告ムシ、即時二迎撃二移ル』

その瞬間、周りの壁から、によきによき、石のゴーレム達が現れた。

「ええええええええええええ! ! ?」

(こんな撃退機能まであるのこの塔! ?

樹さんも、このことは言つてなかつた。たぶん知らなかつたんだろう。知つていたらきっと、彼女の性格なら、絶対教えていたはず！
「くそつ！ こんな所で引けるか！」

（今日ここに入るつて決めたんだ・・・あきらめるか！ 逃げてたまるか！ こんな所で、後ろを振り返る余裕なんて、いまの俺にはない！ 前につき進め！ 歩みを止めるな！ このまま学園長室まで突つむ！）

彼は、ゴーレムに群れに追われながら、塔の中に男子初の侵入をとげた。

「はあはあはあ・・・」

（反則だあ～。この塔、ゴーレムだけじゃなく、あんな撃退システムがあるなんて・・・よく生きてらたなあ・・俺。）
深さがわからない落とし穴。

それに超高速で飛んでくる鎌。

部屋に逃げ込んだら、閉じ込められ水攻め。

そのたもろもろ、トラップの数々。

何回・死んでたかわからない。

「くつ」

（これは試練なんだ、男が魔女になるといつ、普通ならありえない偉業を達成するまえの・・これくらい乗り越えてみせるとこいつ神の提示！）

そうゼーゼー言いながら、前向きに考えることくらいしか、今の俺にはできない。

「ゼーゼー」

それはそつだらう、全長一万メートルの塔の中で、10時間もさまでよつてこるのだから。

祭がふらふらとさまよって歩いていると、ふと壁に。

『この先100メートル先に学園長室』

といつパネルが壁に貼つてある。

（よつしゃあああああーー学園長室までもうすぐだーーー）
祭は涙に顔濡らし、意氣揚々にスキップしながらこの先の学園長室を田指した。

（つこにここまで・・・約10時間さまよつて、あと100メートル先の場所にまでた・・・全長一万メートルのこの塔で、よくこ

ここまでたどり着いたものだ・・・

彼は自分に感動していた。

(そうだ・・俺は、こんなところで、迷っているわけにはいかないんだ！)

脳裏に10年前の、あの日のことを思い出す。

(あの日、あの時みつけた、自分の道を進むためにも・・・)
大きな白い翼、温かい手、彼女に助けられた時から、彼は魔女になると心に決めて願った。

(願ったなら止まるな、行動しろ。

願うだけならだれでもできる。

叶えるのは、願いじやない！叶えようとする信念と行動力だ！

前を見る、後ろを振り返るな！ただ全力で、自分で決めた道を前に進め！

そのとおり。

『こよきーん』

目の前の床から、これまでより遙かにおおきいゴーレムが出現した。

「なあ！？？」

(不意を突かれた！？)

ゴーレムはその巨大な拳を振り上げ、それを祭り向けて、超音速で振り落とした。

「！？・・避けられない！」

(なら、受け止めるしかない！　受け止められるか？否。受け止めて見せる！！)

そう祭が決意した時。

「！？」

『ザッショック』

「ゴーレムの体が真つ一つになり、そのまま砂となつて消えた。

「な・・・なにが・・・」

（どうなつてまる？）

なにがなんだかわからない。なにもしてなのに助かった。

（これは・・・一体どうして？）

そのとき。

「そこでなにをしている？ 貴様は・・・」

「！」

ボソッと言ふ感じの声だが、その声冷たさに、一瞬ビクつとして、体が硬直した。

俺はその冷たい声の、持ち主を見た。

そこには、この学校の制服を着た、黒髪の少女がいた。凛々しくかつこいい雰囲気の女性だ。

「あ・・・えーと」

（どうしよう？ なんていい訳しよう？ 俺はいま、侵入者なわけで、もしかして俺って？ 悪人なんじや？）

返答しだいでは、戦闘になるかもしれない。祭は慎重に答えを模索した。

（ここは絶対、穩便にすませたい。）

決して、不純な動機で、ここにいるわけでないのだから。

（魔女になりたいからここに侵入したといえば、きっとわかつてくれる・・・）

「はつ・！」

俺はそのとき、田舎の村での、ある出来事を思い出した。それは村のみんなに。

「俺は魔女になる」

そう夢を語った時だつた。

それを聞いた一人の少年が。

「魔女学つて女しかいねエーんだろ？ 口目的で入るのか？」

『ちがつ――――――』

(そんなことは断じてない!)

あのときのことを思い出して、祭は心のなかだ叫んだ。
男が魔女になりたいなどと安易に言つたが、どれだけ誤解をまね
くことがある日学んだ。

あとオカマなのか?とかもあつた。これが一番多い。

俺がどんな弁明したところで、誰もが俺を変態扱いした。
幼馴染には。

「必死すぎる」と、逆にあやしまれるが、

つと、ダメだしされる始末。

だが、夢を誤解されて、弁明しない人間がどこにいよう。
だが、あのときは子供だった。

『なんでみんなそんなこと思つのだらう?』

そう思つていた。

だが成長して大人になつた今ならわかる。

(H口目的だ・・・・俺・・・)

いや、そんなつもりまったくありませんよ。

客観的一般論では、そうとられても仕方ないとこつ」とで。

(必死になつちゃダメだ!・・・よよ・・・余裕に・・・ゆゆ・・優雅
に・・せ・・せ・・・説得力のある、い・・いい訳を考えなくちゃ・・
)

てんぱりまくつて、きつと余裕も優雅さも説得力ない、言い訳を考えそうだ。

そんなこんなで、頭がいっぱいになつてゐる俺をを無視するよつて、
黒髪の彼女は、祭に一步、一步、近づいてきた。

『どうするどうするどうするどうするどうする・・・
どうするどうするどうするどうする・・・』

もうだめだ土下座しかない！そう思つた時。

黒髪の少女は、俺の田のまえに来て、口を開いた。

「おまえは・・・・・」

『ぐひひひひひひひひひひひひ』

「一」

「！」

絶妙なタイミングでファンファーレがなり響いた。

それは鮮やかに美しく。

別にその場に、人工の楽器があつたわけではない。人体の楽器、お腹の音だ。

もちろん俺じやない、彼女のだ。

「あ・・・あの・・・（カアアアアアアアアアアア）」

この瞬間、俺達の立場はなにもかも逆転したように感じられた。彼女はものすごい顔真っ赤にしながら。

「あの・・100円貸してくれないか？たのむ・・・」

（なぜ100円！？）

なぜかこの状況で、100円を要求された。

黒髪の彼女は、顔を真っ赤にしながら、田を会わせず、申し訳なさそうに目を伏せていた。

それは、お腹の音を聞かれた恥ずかしさのか。

それとも100円を貸してくれつと、頼んだ恥ずかしさなのか。はたまた。複合的恥ずかしさなのか。

（・・・・謎だ？）

俺は一番の謎を聞いてみた。

「百円をなにに使うつもりですか？」

理由はなんとなくわかつたが、つい聞いてしまった。

「そ・・それは・・・アン」

「アン?」

「うううううううううううううう

2度目のファンファンが鳴り響いた。
なにも言わず俺は、そつとガマ口の財布から、200円を取りだし
彼女に手渡した。

「ありがとう・・恩にきる」

彼女は顔を真っ赤にしてすこし潤んだ瞳で、上目使いでそういった。
さつきまで凜々しくかつこいい彼女のイメージはどこにもない。いま俺の目の前にいるのは凜々しくかつこいいがお腹を空かせたかわいいそうな子だ。

（あんま変わつてないや・・）

いや実際ギャップはめちゃめちゃありますけどね。

「いえ大したことしてませんよ・・じゃあ」

俺はそういうと、彼女と分かれて、100メートル先の学園長室を
目指すそうとした。

だが、ふと思いついた、別れ際の彼女に俺は。

「あの」

「なんだ?」

彼女はもう平静を取りもどした。

前のかっこいい凜々しいイメージに戻つていた。

（なんという回復力!もしかして魔法?）

俺は聞いた。

「さつきの「一レムを倒してくれたのは、あなたですか?」
「ちがう・・・私は人助けするような、善人じゃない」

「そ・・・そうですか

（・・・・・）

祭は少し考えたあと、何を思ったのか。

「あの・・・男がこの魔文学について、変に思いませんか?」
「興味ない」、

「俺はここで、魔女を、田舎者扱い思つていいんです。変じやないですか？」

「興味ない」

「……………ですか」

さきほど、顔真っ赤にしていた彼女は、もつそこにはいない。ドライな顔でそう言い放つた。

ぐつぐつぐつぐつ

また鳴つた。

ホットになつた

「……………もうパン屋にいく」

「は……はい……引きとめて」「めんなさい……なにを食べるんですか？」

「アンパン」

「そ……そうですか」

真っ赤な顔でアンパンと答え、こじんまりと彼女は去つて行つた。

（なんかかわいい人だ……）

それが名前も知らない、彼女への俺の第2印象だ。

（でも、男が魔女を目指すといつても、全然気にしない人もいるんだなー、それにいちおう、侵入者なのに、そつちも気にしてないみたいだし……）

「まあ世の中、差別する人ばかりじゃないってことかも」

（むしろそう思つてゐる俺こそが、差別してゐるのかもしれない。）

「反省しないと……」

（でも……）

後ろを振り返り、もういない彼女を思い出した。

「ほんと……ホットでドライな人だつたな……」

カツカツカツ

一万メートルの塔の廊下で足音が鳴り響く。

それは、石置みの廊下を、早歩きしてパンジーを手指す、黒髪の少女の足音だった。

黒髪の少女にお腹が洞てしむなか
反省をしていた

（ぐ）・・・まだ未完成たなあの魔法は、あの程度の「レム」を破壊するのに、かなりの魔力を食つてしまつた。もうすこし魔力の燃費をよくしないと

『ベーリングアーチipelago』

卷之三

() ちの燃費もな・・・ ()
ぐつりつ () ・・・よすぎない・・・補給しないとなアンパンで・・

だが彼女は知らなかつた、コンビニでいま、アンパンが急激に売れ切れていることを。

「彼女がアンパンを購入できたのは、ここから10年先の55件目のことだった

『それ以外を食べれろよ』
やだ。

そして黒羊祭は、黒髪の少女とは対象的に、廊下を忍び足で歩いて
いた。

100メートル先の、学園長室を目指して。

（今度はゆっくつ・・・不意を突かれても避けれるよつて、慎重に・・・）

今度、いつまたゴーレムが襲つてきても、避けられるよつて、祭は最新の注意を払つていた。

だが、なにも妨害もなく、学園長室前の扉にたどり着いた。

「ふう・・・着いた・・・・・・」

たつた100メートルが、アメリカ横断に匹敵する疲労を感じた。一度したことがあるが、あのときより、命が賭かっている分、この100メートルのほうが、達成感があった。

（・・・・もう、ゴーレムも襲つてくる気配はないけど・・・もしかかるして、侵入者迎撃システムの魔法効果が切れたのかな？）

「・・・・・・」

（やつぱり、あのゴーレムで最後なのかもしれない。ボスっぽかつたし・・・自動発動型のトラップで、時間がくれば解除されるかも・・・）

そして祭は

スツ

目を閉じ。

「ふうー」

つと一呼吸した。

そして、田のまえの、念願の学園長室の扉を見た。

（ここが学園長室・・・・・）

扉の札に、そう書いてあるのだしそうなのだろう。

「ここに学園長が・・・・

（よく知らないし見たこともないけど。）

「不死の化け物か・・・・・」

「ゴクリ・・・・・・・・

祭は息を飲んだ。

そして。

『ぱんぱんぱん』

あらためて、3倍の気合こをいれた。

「よつし・・・・・・いぐや・・・・・・・・・・・・・・

（痛い・・・
さすがにいれすぎた・・・・・・）

がぢやり

祭は、その未知の存在である、学園長がいる部屋のドアノブに、手をかけ。

その重厚な扉を開けた。

『アヒヤウ』

心の中で。

（ひつやーつーーーー）

といこながら、ゆっくり開けた。

開けたそこには、広い空間とその真ん中に、一人の女の子がいた。

きっと風呂上がりだつたのだろう、タオル一丁で。

そのタオルで、頭を拭きながら。

「一」

女の子と田が合ひ。
すぐに田を「反らした。

「・・・・・・・・・・・・」

その場に、重い沈黙が流れた。

その緊張の糸を、断絶するよひに女の子は。

「何者じやお主？学園長である、わらわになんの用じや？」
かわいい透き通つた声でお婆言葉で、とんでもなことを見つめた。

「学園長！？」「

（こんな子供が、タオル一丁の子供が・・・学園長！？）
なんと、田の前にいるちいさい女の子が、学園長だとこいつ。
彼の予想では、見た目おばあさんくらいを予想していた。
だが、予想は大きくかけ離れ、その容姿は子供だった。
だが納得はいった。

（・・・50年以上、この容姿なら・・・誰もが不死であるひつと思ひだ
るひ・・・）

祭は困惑したが、ほつと胸をなでおろした。
(どんな怖い人かと思つたけど、なんともないこんなかわいい子供
とは、心配して損した。)

祭が一瞬、気が抜いたその瞬間。

学園長は、タオルを濡れた頭に巻き、田にせもとまらぬ速さで、祭の
首を掴まみ、そのまま床に押し倒した。青向けに
(ぐうううううぐるしい！？)

幼児体型の学園長は、祭の胸にお尻をずつしり馬乗りにして。両手で
祭の腕を抑え、床に固定した。

（なんて力だ！人間を遙かに超えている・・・こんな子供が・・・）
祭は動きは一切封じられ、床に固定され身動き一つできなくなつた。
「聞いておひうわらわが・・・お主は何者じやと・何の用でここ
を訪ねたかと？・・それと男の分際でなぜこの塔に入れた？・・理
由をまづのべよ」

学園長の威圧と、そのアレの、アツアツのせいで俺は、まともに前も見れなかつた。

「早く答えよボーズ」

תְּהִלָּה

学園長は、せりて圧迫感を強めた。

れていただろう。

(あいつ……答えを隠しえれは……死ぬ!)

アーティストによるアーティスト

・・それは俺にはわからない

そう答えると、俺は思ひとおりだった。

(この状況でそんな曖昧な答えを、この学園長は許すのか?)
言えばどうなるものかわかつたものじゃない。

(答えるな) 第一回は：「」の子か：「」学園長か：「」満足で

禁書最良の御心を摸索(ノル)

だが、小さい子供に、小さいお尻で、小さい両手で、床に押し付け

其後人多以爲非，故不復用。惟其子孫，則又復用之，此固爲後人所遺也。

それと、子供とは思えない鋭く赤い眼光に、射ぬかれたせいもあるだろう。

おんで獵子に捕らねたら、サヰた

「3秒以内に警戒せ……警戒の場合……」

11

「噛み殺す！」

学園長は、喉元に開いた歯を押し付けた。
ゾクとなつた。

それはまるで、自分が捕食者に捕らわれた、あわれな子羊のように感じた。

あの強大なゴーレムより遙かうえの。

死の予兆

圧倒的。絶対者からの。

死の宣告。

死死死

「1。 それ以外の言葉は、祭の脳裏に、一切浮かばなかつた。

死のカウントが始まつた。力

26

「俺は・・・」

- 3 -

「魔女になりたいんです！！」

!

祭は、声を振り絞り。思いのたけを吐き出した。

最良の答えなど外吹く風。
ただ一つの大切な夢をぶちまけた。
3秒がすぎた。

学園長は。

ポカーンという顔をしていた。

かわしがつた

そしてまた 汗黒が流れ

卷之三

鳴り響いた。

大きく透き通った、かわいい声で部屋中に。

「あははははははーー！男のくせに魔女なりたいじやと？」

二
六

おははははは おせこじいぬこや お出
わらわも長ーこと生れたわだが、お出のよつなまつ初めにひ
まつ

• • • •

ものすこく笑われた。

きつと学園長の人生に比べれば、俺の人生なんて短いモノなのだろうけど、こんなに笑われたのは生まれて初めてだ。

裏から消えることはなかつた。

祭は、自分の夢を語り、笑われることはない。」
されば、『元氣だらうぜワニンハ、うなぎー』。

だが学園長は違つた。

まるでおもしろい玩具を見つけ、喜んでいるそんな笑いだ。

「俺がそう感じただけで、実際は違うのかもしれない。」

（氣を許せないな・・・この人・・・）

祭はそうは思つた。

そして学園長は、俺の胸で、ひとしきり笑つて、一ヤツと口を歪ませた。

「男のくせに魔女になりたくて、しかも魔力までもつておるとな。・
・面白い逸材じやのう? お主・・・」
その雰囲気にのまれ声すらだせない。

「よし・・・」

学園長の顔が、俺に近づいてくる。

（死ぬ!）

そう思つた時。

耳元で。

「お前を、魔女にしてやる!」

「え?」

以外な答えが返つてきた。

「本当ですか?」

「ああ・・いいぞ・・だが『条件付きでな。』」

それはまるで悪魔との契約にも感じた。

だが魔女になれるなら、それでもいいと俺は思つてしまつた。

学園長は、頭にタオルを巻き体を持ち上げ、俺の上で仁王立ちになつた。

そしてせりに、邪悪笑みを浮かべ。

「さあ・・入学手続きを始めようか・・」

こうして悪魔との、いや、学園長との契約が執り行われよつとしていた。

「めふいすー」

そのとき天から、陽気な声が響いた。

「なんじやフェリス？」

「！？」

天上には、体育座りをしている女性がいた。
とがつた耳と大きな胸が印象的な女性だ。

普通とは違つのは、背には蝙蝠のような羽根と、お尻には悪魔のしつぽのようなものが生えていたことだ。

（露出の多い服だな・・・・・）

まるで、小悪魔を連想させるそんな風貌だ。

（そういえば、さつきからまともに、前も見れないなー俺・・・・）

「オトコがまろよくもつてゐのつて、めずらしいのー？」

その質問からすると、ずっと天井で体育座りして、俺達の会話を聞いていたのだろう。

（いつたい何者なんだ？）

学園長と違つて見た目は怪しい感じだが、その存在感は真逆。

害意の一欠けらも感じない、赤ん坊のような、そんな印象を受ける女性だ。

（まるで親子のようだ・・・大きさは逆だけど・・・）

「んーー・まあ・・めずらしげのう、男が魔力をもつておるのは、

生物理論上ありえんしな

「でもいるしーここに！」

フェリスさんは、天上から足のつま先で俺を指してきた。

「そうじやなーーーーーもしかしたら、理論外で産まれた存在な
かもしれのう」

「！」

（理論外？どうこいつ意味だ？）

「じゃあどれくらいめずらしこのー？」

「ネッシ と同じくらいかのう」

「でもネッシーは、とうの300カイくらいで、たくさん飼つてい
るよねー？」

「！？」

「そうじやつたのう・・じゃあイエティーくらー？」

「にやはは、それもたくさんいるしー」

（嘘おおおおお！？いるの？あの伝説上の生き物たち！？）

「じゃあこいつも飼うか？」

「かうーー。にやはは」

そういつて学園長は、服を着ながら俺をぎょりと見てきた。

『ゾクツ』

「冗談じやよククつ」

まったく「冗談に聞こえない。

「・・・あの・・学園長・・・」の人は？」

「こいつか？こいつはわらわの使い魔、悪魔のフェリスじや

「よろびくーにやはは」

「悪魔！？ 悪魔つて実在しているんですか？」

「そりや失礼じやろう本人を目に前に・・それに魔界にいけばうじ
やうじやいるぞ」

「魔界！？ 魔界つてあるんですか？」

「そんなの痴識じやね。」

(「JRの常識ですか!」)

「まあいやつは、わらわのペットみたいな奴じや、氣にするな」

「…」ヘントですか…」「

「はい、おはようございます。お嬢様の散歩用の車椅子を用意してお待ちしております。」

「しません！」

「じゃあお前につけて、散歩してやるわ」

「上野はせはせはせ」

俺達のやりとりを聞いて、悪魔のフェリスさんは爆笑している。

（でもなんだか…この二人からはなにか主従こえた信赖関系を感じる。絆を超えたなにか…氣のせいかどうか？）

「で？ボーヤ」

へ？・・・は・・はい

「質問」……「どういふ」……

「今日はどうぞおにぎりに機嫌

• • • • • • • •

俺は目を反らしながら聞いた。

卷之三

「服を着てください」

「着ているじやろ?」

「モモヤマ」

「…………真ん中です…………」

「マンなか? ふふ・・・ヒロこのつボーヤ

• • • • •

もつ言葉もない。

「ひして俺の魔女への扉がいまが開かれた。
閉まつた感じもするけど氣のせいであつてほしい。

「ふむふむふむ・・」

俺は学園長に聞かれ、なぜ俺が魔女になるひとしたのかの、経緯を説明した。

もちろん聞かれたからには、正直に誠実に、あの日のことを正確に語つた。

だがすこし脚色はあつたかもしれない。
たぶん、興奮していたせいだろう。

命を救つてくれた、あこがれの人のこと語るのだ、仕方ない。

「つまらん」

「はい?」

俺の夢はさも当然の」と、学園長に一蹴された。

「ちょーつまらん。」

こんな反応は初めてされた。

「ノミ、じゃな。そんな夢の理由・・」

ムカツ

「なつなんですか！学園長！理由をおしえてください！」

大切な夢を、あこがれのあの人を、バカにされた氣分になり。
ソファーに深く座つた、学園長に詰め寄り、つい声をあらげてしまつた。

夢を、けなされるのはいいが、夢を目指す理由だけは、許せなかつた。

「あつ！」

キツつと学園長に睨まれた。

(しまつたー?)

天井から。

「まつりちゃん、「ドモあいてに」、おとなげな「ゼー」

フーリスさんからお叱りをうけた。

「す・すいません」

(つて・・・子供じゃないしー)

「子供じゃないのじゃ! フーリスー! 」

「にやははめん! 」

(もしかして俺を、フォローしてくれた?)

「・・・まつたぐ、魔女を田指す理由がそんなありふれたものす!」

くびりでもいい理由とは

「・・・・・」

「スーパーつまらん・・ハイパーつまらん・・//ラクルつまらん

「そこまでいわなくとも・・・」

「もつとまつとうな理由があの! ・・・」

「どんなですか?」

「世界を征服したとか、入学してエロゲーの鬼畜主人公バリに女の子達を攻

略したいとかの!」

「全然まつとうじやないのです! つて・・エロゲーってなんですか鬼畜つてなんですかー?」

「なんじやそんなことも知らないのか? 純情田舎少年めー! すいません田舎者で。

「なんならわらわが体で、教えてやるつか?」

学園長は俺を見て、いやらしく舌なめずりした。

『ぶるつ』

「え・・遠慮しておきます・・・」

きつと死ぬほど辛いことをされるだらけ。

鬼畜その単語があやしい。

「なんじゃ・・本当につまりん奴じゃのう・・やはり貴様は、Hロ
ゲーの主人公にはなれそうにないのう・・・」

（だからわかりません！）

「まあいい。なりたくなつたらわらわにゆえ。すぐにこの学校の色
んなキャラの攻略法をおしえてやるぞ」

何を言つてるんだこの人？

「こうみえてわらわは、エロゲーの達人といわれておるからのう」

「？・・・だれにですか？」

「あたし――・・・にだけ」

一人か！

悪魔のフェリスさんは、空を飛びながら。

「すごいんだよー、めふいすーまいにちーねつとしょつぶのアマゾ
ンつてかわにれんらくしてーかいまくつてるのー」

「すごいじゃうひ」

なにが？

えへんつて感じで、学園長はない胸を張り腰に手をおく。

「そ・・・そなんなんですか・・・」

（さ・・・さつぱりわからない・・・）・・これが都会とこつものか。）

「それにのうわらわはのう、エロゲーだけはではないぞ・・・」

「？」

「わらわに攻略できない、テレビゲームもはなーのじや」

「はあ・・・そですか」

（テレビゲームか・・・）

「俺もファミコンとか、ゲームボーイとかもつてますけど・・・」

「！？・・・ぶはーっ・・・お主、何者じゃ！こまどりさんのお名を口にす
るとはお主、通つわもじやのう・・・」

「はあ・・・・」

都會の言葉が、わからない。

ふと祭は、学園長室にあるテレビの「トッキ」を見た。

そこの中には、たくさんのフタミノン、ゲームボーイ用のゲーム機が「じゅりゅり」入っている。

「…………学園長って、ゲームとかも、やるんですね？」

「あたりまじやうひ、こんな所にずっと閉じ込められておるのはじやからうう、暇で暇でじょうがないのじや」

「閉じ込められてる？」

「おつとここれからは、トップシークレットじや」

「はあ・・・」

（早く入学手続きしないかな・・・）

「まつたくいい世の中なつたものじや、咲はるの塔の、何百万冊もある・・つまらん魔法書を呼んで、時間を暇をつぶすしかなかつたんじやが、いまじやゲーム万歳ーじやーゲーム最高ーーじやあ」

「ぱにぱ笑つてこる。

（やばいかわいい。撫でてあげたい。たぶん死ぬだろけど・・・）

初めて、学園長の子供らしい笑顔を、見た気がする。

「・・・あの学園長はここから出れないんですか？」

「ん？まあ・・のひ・・出られるんじやが・・本体はでられんのじや」

「本体？」

「まあいい・・わらわの話は・・・」

（気になる・・・）

「で？お主の夢は、ここに入学して女の子達を攻略する・じやつた

な？まず誰からいくわらわのお勧めは・・・」

「勝手にそれを、夢にしないでくださいーーわざわざこまつたけど

俺の夢は魔女になることなんです！」

「魔女になつて、女の子を攻略？」

「攻略から離れてくださいーーどれだけ攻略させたいんですかーー」

「しないのかつまらん。」

ショボーンという感じになつてゐる

かわいいーいちいち、妹にしたい。
ずっとこんな感じなら。

「ねーーんこね今田さ、5円10円じやな・・・・・おわかわわわ

「おまえが今日、JUNにきたのは、JUNに入学するためか？」

はいそれですけど でも驚きました ニセの田舎のハンバーグに、5月10日に行けば魔女になるって書いてあつたのに。まさか実は3月3日で2カ月も印刷ミスがあつたなんて・・・

「アホウ！それは20年前の情報じゃ」

「ええ！！？ そうだったんですね？ どうりでさよう」

「とにかく」…「す」…田舎が却、鄧繼から来た人が、チャソネレ
お前の苦難は

「が2チャンネルしかないのを驚いていたし・・・」「ぶうウウつ！」

レベル高い田舎じやのうー！

「えつり置く」すがご

卷之二

「ええええ早い！？」

「でも火曜発売つて後ろに書いてありますよね？」

「一日、あれでるが、お主……」

(ただおじやなこ田舎おじやのひ・・・ひまわ)

「あの……そんなことより、学園長……魔女にしてくる条件ってなんですか？それを満たせば、俺を魔女にしてくれるんですね

?

「いむじに入学させてやる。そして卒業できればなれぬ。」

(せりせり！)

「それで…・・・条件とは」

『ひやー』

学園長の口元が、いやらしく淫む。

「なに・・かんたんな条件じゅ、それは・・・」

「「」に女装して入学してもいい。」

「？・・・・・・・ええええええ！？！？それは無理ですか？」

！？お・・・男の格好ままじゃダメなんですか？」

「ダメじゃ」

「な・・なんですか？」

「それはわらわがつまらないないから・・・・・・じやなくて・・・・・

・困るからじゃ！」

「いま・・・・つまらないって？」

「魔女委員会というモノをしつゝおるか？」

（無視された！）

「し・・知りません・・・」

「10年ほど前にできた魔女による魔女のためによる委員会じゃ」

「・・・・その委員会が俺の女装になにか関係があるんですか？」

「おおありじゃ！」

学園長は興奮したように言つた。

「まったくあやつり！わらわが「」の手で「」の魔女学を開いたとうの
に・・・勝手に委員会なるものを作つて魔女の法律や規則を勝手に
決めおつてからに。」

（魔女の裁判所みたいなところかな？なら弁護士も魔女いるのかな
？）

「そして一番カンに障るのはじやな。わらわにいちいち、生徒への
指導方法を口だしてくる」とじや！時間割りに始まり・・・魔女の
作法！魔法の教え方！学校内の規則まで。まったく誰が魔法を教え
てやつたと思っておるのじや！恩知らずが！」

（たしか、樹さんが言つていたけど、今は学園長は、先生職をやめ
て、「」の卒業生の魔女の先生が、魔法を教えているつて。・・じ

やあその前は子供のように怒る、この学園長が魔法を教えていたんのだろうか……想像できない。）

「学園長、疑問があるんですけど？」

（なんじゅ？ 言ってみろ）

俺は昔から、気になつていたことを聞いてみた。

「魔法って一体なんなんですか？ どうこいつ原理で発動できるんですか？」

「……お主はなぜ、この宇宙が存在すると想う？」

「……じりません……もしかして知っているんですか？」

「しりん！ まあ……そういうじゅ」

「？」

「つまり一めふにすに、もよへわからなーーことだよーー」

「そのとおり！」

まったくわからなのに、なぜこひこひ、ない胸を張るのだろう。（わからない。）

「むつこひりしこのう・・・いまわらわの魅力的な胸をガン見したのう

「し・・してません！ それこするほどい・・・

（はつー）

「むつ・・ないと申すのか？」

「そ・・そんなことは・・・

（ありますけど・・・）

「めふえすはペチャパイ！ ペチャペチャペチャパイ！」

フェリスさんはいつのまに、俺に後ろで回り込み。

胸を揉みまくつた。

「ふえ！ フェリスさん！ なつにする・・・ひや！ する・・・ひや！ ・・・んつ！ です・・・ひやかつ！」

「んーー・・・・・・・

フェリスさんは、俺の胸を吟味するように揉み。

「はや、じつのはうがめふにすよつおおきこ！ はやー

『ぶちつー。』

なにかが、ブチ切れた音がした。それは。

「フヨリス――――――！」

学園長だ。

そして、一人による、追いかけっこが始まった。

「こんぶれつくすこんぶれつくすーめふいすのこんぶれつくす！な
いのがこんぶれつくす！やつほーにやほー！」

フェリスさんはスキップしながら、変な歌をうたいだした。

「だまれ！あと1000年くらいすれば、わらわも大きくなるわー！」

（どれだけかかるの！）

（とういか・・胸が小さいのがコンプレックスなのか？・・・なん
かかわいい。）

「クスつ」

「なつ！？なにを笑つておるーお主？わらわの数千年の悩みを、馬
鹿にしおつてからにーーー！」

（小さい悩みなのに！スケールでかつ！）

「ご・・ごめんなさい、なんかかわいいと思つて・・・

「か・・・かわいいじゅとーー？」

（しまつたつい本音がーー）

「・・・・・」

学園長は、急におとなしくなり。赤く赤面してすこしモジモジして
る。

「まつたく・・・かわいいなどと、男に初めていわれたわ・・・

「い・・じめんなさい」

「ふん・・・お主は事実をいつたまでだらつ・・・あやまるなー」

「はあ・・・・・・・」

（不死といつても子供だなー、なんか凶悪だけど凶悪に見えない。
これが、ばっちゃんが言つていた凶悪かわいいか？）

「まあか・・・わいらから攻略していくと、お主やはつ、通つわ
ものじやな・・・」

「はあ・・・」

（なにかす）い誤解されてないか？・・・勝手にしたことにされて
る）

「・・・まあいい・・・話を戻す、なぜお前が女装しなければいけない
のかといつと、魔女委員会が決めた魔女法律といつものがあつてな・
・」

「魔女法律？魔女に対する法律ですか？」

「うむそ（う）じや！たぶん・・この第217条は、絶対ありえないこ
となので誰も覚えておらんだらうが、それが原因じや。」

「そ・・それは・・」

「それはのう・・魔女法律第217条、男は魔女にな（）ことはでき
ない」

「！」

「それを破れば、なんらかしらの制裁を受けるじやろ（）。破裂した
わらわにではないぞ。破つたお主にじや

「！」

「まあ・・そもそも・・わらわの力は、すべての魔女が束になつ
てもかなわないくらい強い、罪など外吹く風じやがなフハハ・・
「ドクサイシャーー」

「お主も・・実力で魔女委員会をネジ伏せて・・・法律を替えてし
まうといつ手もあるがな。」

「やつちやえー」

「や・・やりませんよ、できても！」

「なら女装すしかないな。」

「魔女学に入学するだけならいいんじや？・・魔女になるわけじや
ないんだし・・」

（ああ、ついでに417条魔女学は男子禁制ともある）

「つづり

まったく、男はここに入れぬのなら、217も417もいらぬはずなのになー、法律の無駄づかいじや。今のは、それがおまえにとつて仇になつたがのう・・入れず、なれずハ方ふさがりじやな。どうする?」

「破つたばあいは?」

「破れば魔女委員共の犬である、魔女騎士が来て、捕縛され執行猶予もない速攻牢獄いきじや。最悪は死刑もありえるのう・・」

「死刑!?」

(しかも魔女騎士・・それだけは・・・)

「わらわは、おまえがどうなるうと、どうでもいいのじやがな。おまえのような極上の素材が失われるのは魔女界にとつても、大きな損失になるじやろう、それは避けたい。」

「そ・・そんなに俺の才能を、買つてくれてるんですか!」

「うむ」

(違う意味でだがな・・ククつ)

「じゃからお主が女装をすれば万事解決じや。お前も死ぬこともはなく、魔女界もうるおうというわけじや。」

「・・・・」

「ただおまえが、ガマンすればそれでいいことなのじや。」

「た・・たしかに・・・」

(なにがたしかにじや!調子にのりおつてから)「・・・お主のようなおもしろい素材、みすみす逃がす訳なからうー)

「それで女装すれば、男でも入学できるんですか?」

「はあ?なにいつておるのじや、いままでの話、聞いておつたか?」

「そんな訳ないじやろ・・・」

「でもさつき、女装すれば入れるつて・・・」

「馬鹿がお主は!わらわは女装すれば、魔女学にはいれると、魔女になれると、いつておるのではない!」

「お主が女装して女として振る舞い、卒業まで魔女委員会にバレ¹せれば、魔女になれるといつておるのじや・・・」

「えええええ！…？ そんなの無理ですよ！ 僕…女として振る舞つたことないですし…」

「なにをいつておる…都會の男はな…生きてこらつたこ一度は女装して。女として振る舞つものなのじやぞ…（嘘）」

『ガビーン』

「都會…・・・恐ろしい」

「そだつたのかーーびつくり

（んなわけあるか、馬鹿ども…）

「魔女になつたあとも、バレたら即バツドンデじやが、まあ…夢がかなつたらあとなら、死んでも本望じやう…くへつ」

「でも無理です…なにか他の方法はないんですか？」

「ない（キッパリ）」

「そんなん…」

「その程度か？」

「え？」

「お主の魔女への思いは、その程度かと聞いておるのじや…」

「！」

「魔女になりたいのじやう…・・・あゝがれのその白い翼の魔女のよ、なりたのじやう…」

「…・・・はい！」

「なら女装して女と振る舞い、卒業までバレずに魔女になる覚悟へらへ持て…」

「…・・・…セ・…そりですよ…・・・たしかに…・・・そりだ…わからました俺やります。」

（・・・ビックリするほど、あつかいやすいのーこの男…）

「俺の魔女への思い、この学校にぶつけてやります…」

「女装してか？この変態め」

「変態じゃないですよ…」

「なにを言つておる…夢を叶えるため、とかかつこつたて、ノリ

ノリで女装して、女のパラダイスに入り込むとする男は、どうやらどうみても変態じや」

『がびーん』

「異論は？」

「…………まつたくもつて、あつません」

『ガクつ』

俺は、膝をついてがっくりした。

『ポン』

その時！後ろから肩を叩かれる。

振り向くとそこには、悪魔のフーリスさんがいた。
(もしかして・・俺を励まして・・・・！)

「へんたい」

がちゃ――――ん

なにかが壊れるのを感じた。

「あの・・・・学園長・・もし入学途中で男だとバレたら、どうするんですか？なにか対策は？」

「死ね」

「死ね！――？」

「気性の荒い魔女見習いたちじや、自分たちの中に女装している、変態男がいるとわかれば、縛られ吊るしあげられ、サンドバックじやうつな（「！」）」

「うわ～～～～～！」

「かりに・・命が助かっても、ニュースやネットで犯罪者として、お前の顔と名は世界中に広まり、社会的抹殺は確実じや」

「むしろ、サンデバツクの時点で、死んだほうがマシと思えたから、いの、地獄がまつてあるじやろつな。」

卷一 二十

「バレたら、死だほうが楽というわけじゃ。切腹用の短刀を、あとでネットで買って送らせよう、わらわからぬサービスじや」「

(やはい心が折れそうだ……)

〔 二 〕

「が・・・学園長お・・・」

はしめての園長が 棘には見えなか

が
び
ん

わたくしがそれをたへる——わん

「ホノホノ」

ため息しかでてこない。

夢のまた夢じやぞ！」

そんな夢には、彼の母たるとして、いじつてゐる。

卷之三

「俺は女装して魔女なります！」

一
い
い
・

三
二
一

କେତେ ଏକ ଉପରେତିରେ ।

一変態の「きじやかな」

がくつ。

「レフ」

「……お主の意思はゆるがない、セリ考えていいのか?」

「はい」

「・・・まつたくあきれた変態じやな・・・まづはコレを飲め。
そういうてなにか、黒い丸薬を、親指でピンと俺に飛ばした。

キヤツチ。

「・・・これは？」

「
飲め」

水の入った二ツ瓶を取り出し、俺に渡した。

「魔女になるために薬じや一

「副作用などまったくもつて絶対ない。安心して飲め（にぱー）」

(嘘だ！絶対ある！)

俺こは、飲む以外の選択肢はないよ。」

昔ファミコンでやったドリームファンタジ

折肢があつたことを思い出した。いいえを選びつづけても、結局はいを選ばなればならない、そんな状況を。

（なんだかなー・・・）
俺はそれを飲んだ。

「ゴクリ」

「…・・・・・・めこしに・・・」
「アーヒヤウルルアーヒヤウルル、・・・アーヒルな副作用がでるのか
のう(わくわく)」

「やっぱり、絶対出るんですか！副作用！」

「・・・そもそも・・一体この薬で、どんな効果があるんですか?」

老の日

頭の後ろのほうが、ワシリシしてきた、そして。

ふわー

つと俺の髪の毛が伸びていく。

な・な・な・な・なんじやこじや!!??

「え？ 一ノ瀬が副席用じゃねーんだよ」

ですか？わざわざ・「・」

卷之三

「・・・ そうかもしませんね・・・ 短いよりはばれずにすむかも
しないけど・・・ でも」

「そんな物、どうやって作ったなんですか？原料は？」
「ん？ 確かお祓いでもってこられた、髪が伸びる呪いの人形を、すりつぶして作ったものじや」

「どう！？」

(呴泣せてくれてるんですかアアア)

— —

俺は、伸びた髪の毛を一本つまみ、プチっと抜いてみる。

『わざ――』

「……髪の毛が一瞬で生えた！？」

「それはきっと、副作用じゃな。」

「副作用というより呪いでですよー」「レー」

「似たようなものじやろ？」

「ぜんぜんちがいます！」

科学と呪術、ぜんぜん交差してませんよ。
解呪方法はなにかないんですか？』

「ない」

がーーん

「まあ死ぬまで禿の心配はないのじや、よかつたではないか、わらわに感謝しろ！」

初めてみた、人を呪つておいて感謝させる人。

「300年もあれば自然に解けていくじやんの・・・」

「とつぐに体が、自然風化してますよ。」

「呪術としては、まだまだ軽いほうなんじやがな・・・文句がある

なら、重いほうも受けてみるか？」

「軽く呪つていただき、ありがとうございました。』

感謝した。

「うむ」

そのとおり。

『ビ

ビ

ビ

』

学園長室に、10時間前に聞いたあの、けたたましい警報音が鳴り響く。

「あつたくつねれこのい・・・」

「ひめこりや」

「なんですか」の音? なにかあつたんですか?」

「緊急信号のよひじやな」

やつぱつと学園長は、机にある、線がつながつていなこ黒電話の、
取扱説明書をとると。

「じつした? なにがあつたのじや? セつかく遊んでいたといつのこと

・」

(遊ばれてたの俺?)

「・・・なんじやと・・・」

学園長が初めて厳しい顔をした。

「ふむ・・そんなことが・・わかつた切るべ。」

『がちせ』

「一体・・なんの電話だつたんですか?」の警報に関係あるんです

よね?」

「・・・別にじつとこつことはなこ。ただ近くの飛行船が、運転不能になり暴走し、滑落して、こままで街に落ちるこつぱんや

「なーんだ・・・・・つて、大変じやないですか! - ?」

「そのよひじやな・・・」

「助けまじよひー・」

「じつぱつじつぱつ、わらわはこの塔からでる」とはでれぬ。

「じやあここでーる、魔女学の生徒に知らせみんなで」

「ダメじやー・」

「なんですか?」

「言ったところで・・助けられなかつた・・といつ痛みしか、のこりん」

「え？ 痛み？」

「現場はここから10キロ先じゃ・・そのつえ墜落まで、あと5、6分、それまでに、その場に到着できる生徒は一人だけしかおらん。しかもそやつはいま、この塔にいないようじや・・魔力探つてさがしたがのう。世の中には、知らないほうがいいこともある。知つていて助けられなかつたより・・知らなくて助けられなかつたほうが、心の傷浅い・・・」

「・・・生徒思いなんですね？」

「こちおう、わらわはこここの、学園長なのでな、生徒を守るのは当然じやろ・・クククフ」「・・・・・・・」

「残念じやがバッドエンドじや・・・・ゲームオーバー！」

「なら俺がハッピーエンドにしてクリアーしてみせます」「はああ！？」

「俺が助けにいきます。俺はもう知つてはいますから、行かないで後悔するより、行つて後悔してきます。」

「・・・・お主、魔法は使えるのか？」

「はい！俺の魔法ならきっと間に合います！」

「すつーーー！まほーはこのとうでしか、サイノをカイカできなのにー！もうツカえるなんてー！」

「いや方法はあ、る邪道で危険な方法じやがな、こいつの場合それとも違うようじやが・・・興味深い。」

「じゃあいってきます」

「場所を知つておるか？」

「あつ！」

「バカめつ

「場所を教えてください学園長ー！」

学園長は俺の顔をじつと見てきた。

「？・？・？なんですか？はやく

「わらわにはたまに、人の死相が見えるのじゃが・・・」

「死の予告みたいなものですか？」

「そうじゃ・・・お主からは、それが見える・・・」

「そうですか・・・それで場所は？」

「なぜ行く？助けたところで、お主にはなんの利益もないじゃろ？夢を叶える前に死んでいいか？」

「しんじゅうよ」

「俺は、救いたいから行くんです。利益とかどうでもいいです。やれに死にませんよ・・・夢叶えるまで絶対に！」

「・・・そうかつづく、お前たち親子は・・・」

「え？」

「いや・・・なんでもない。」

学園長は、指をスッと壁に向けた。

「あつちじゅ」

その瞬間、不可侵で絶対硬度をほこる、塔の壁に、俺がちょうど通れるほどの、穴が開いた。

「ありがとうございます、学園長！一いつてきます」

「しつかり死んでこい」

「死に気でいきます。これくらい救えなくて、魔女になんかになれませんよ」

俺は穴にむかつた、下をみると、高度50000メートルくらいの高さがあつた。

『ひゅおおおおおおおー』

風で、祭の長い髪がなびく。

(「こんなところまで、昇っていたのか・・・」)

「どうしたのじゃ？飛行船はここからまつすぐ10キロ先じゃぞ・・・これくらい飛べんようでは高度1000メートルの飛行船を救ううとななどできはしないぞ？」

「飛びます！」

「自殺する気か？」

タリ

「違うな」「

二十一

魔力を全身に纏つてしまおう。

「闇翼」

少年の背に、黒い翼が展開した。

卷之三

れりあ 力三へあたし！ わたしのはれははてる！ がーがー

ふわつ

その魔力で作られた、黒い翼を羽ばたかせ、祭は、まっすぐ飛行船へと飛び立った。

それを見る一人

あのおんな(たれ)

苗字もおなじ 魔力の質もそぞくにいやされめ一にはあの魔法

卷之三

大和の古文書

「世界一有名な魔女じや・・世界を一度滅ぼしかけた・・・大魔女
黒洋々闇一

「わーお、あー

「たしかにあの女の息子なら、男でも魔力をもつ

かりかにあの女の懸念から
男の半魔力をもってして半魔人思ふ
ではないのう・・」

「やうなのー？」

「つむ、それだけあやつは異質じやつた」「どうゆつ意味で？」

「こんな意味でじや？」

「久しぶりに楽しめそうじやな・・あの人間。これからおもしろくなりそうじや・・ククフ」

「かわいそーあのこメフィスにきにこられてー」「なにをいつておる?かわいいそうで済ます(氣ないぞ)(せんぞ)」

「うわっ!」クアク

「さて・・・まずはこの状況をどうするか見せてもらひや・・・黒羊祭」

学園長は何もない空間から水晶玉を取り出し。そこに向かを映しだした。
そこには祭の姿があつた。

飛行船がこま、滑空していの方向はたしか・・・

「！」

（覚えがあるたぶん、俺がここの本州に来た時に利用した、羽田空港だろ？。船長もできればそこに降ろしたいとおもつてこるはず。あそこは住宅外も少ないはずだし・・・だがどうみてもあそこまでは、いくのは無茶だ・・・このスピードで滑空すれば、あと一キロももたない。自滅はみえてる！ならもつと、ちがつ別に場所に降ろさないと・・・）

祭は飛行船のときこ、先回りして街を観察して降ろせる場所を探索した。

「ないない　ない・・・・・・へつ・・・じつすれば・・・

『一。』

（あそ）だー（）

その頃、じょじょに滑空する、飛行船のコントロール室では「クソつたれ！ いうこと聞かなね！ 一・・・じつなつていやがるだ！ てやんでエー！」

（こ）のままじや 2、3分も持たず、墜落しあまおつー（）

飛行船の船長、真崎 大輔（78）は、コントロールの効かない、愛船に悪態をついていた。

彼の船長歴60年、大ベテランだ

昨日、誕生日で、愛する妻（77歳）と迎え、愛を誓いあつていたのに。

（なんでこんなことになつちまつたんじやー）

白髪白鬚サンタにも似た、風貌の船長は、こよこよ自分と、船と乗客の最後に絶望し・・・謝罪した。

この責任はけつして、彼のせいにではなく、整備員の整備ミスとう、一番ありがちで一番やつてはいけない、おこないのせいである

が。この状況でそれがわかる訳もない。

「ちくしょー！ こんなくだらない、最後をむかえさせりまつなんて・すまねエーすまねエー」

彼は乗客200名に対しても詫び続け。彼は男泣きしながらその場で懺悔した。

『こんじん』

「！」

『こんじん』

コントロール室の窓から音が

「幻聴か！？ クソつこんな時に・・・」

船長はその音、を精神錯乱状態による、幻聴だと判断したらしい。

「それとも・・・」このなきない船長に、死神のおそいかねエー・

・こんなヘマをしたワシを地獄へと案内する・・・」

そう思い船長は、懺悔で伏せて顔を、誰もいなはばずの、窓の外を見てみると、そこには。

「つぎやああああ！ 黒い翼の女の死神！ ほんとにいた！

「死神！ ！ ？ （がーーん）

ちがいます、魔女ですよ

「！ ？

ほ・・本当か？ ・・魔女だと！ ・・おいおい魔女さんだよ・・・
ははっ助けにきてくれたのか？

船長はさきほどの絶望モードから、一気に希望が湧いてきた。

「いや違います」

「はい？」

「実はまだ見習いで、正式な魔女じゃないんです。てへへ・・・」

「そ・・・ そ・うかじやあ魔女学の生徒なのか？」

「はい・・・ いや・・・ それもちがいます」

「はあ？」

「いや・・・ まだ正式に入学したわけじゃないから・・・ そうでねー・・・

いまは・・・・・魔女希望者です。」

「・・・・・」

また絶望モードに突入した。

「と・・とにかく・・君は、この絶望的状況をなんとかできるのか？」

「できません・・

「！？」

（な・・なんなんだこいつは？）

「俺ができるのは、この船を支え、この先一キロ先の巨大交差点に降ろす、補助をするくらいです。」

「馬鹿な！？交差点だと！」

「はい、あそこならこの飛行船を降ろす幅は、十分あります」

「だが無理じや！交差点には人がたくさんいるぞ！」

「ここにも人がたくさん乗つてます！」

「！」

（正しいかもしない・・・このままじゃ墜落するのは必然。ならこのまま彼女に支えてもらい、交差点に降ろし乗客を助けるのが必然。そのほうがまだ幾分被害はすくないのかもしれません。だが失敗すれば乗客と街の人間その両方が死ぬことになる。ワシは・・・）

彼は選択をしないといけない。

降ろすか降ろさないかどちらかの選択を。

被害の選択を、命の選択を。

この状況で交差点に降ろす選択をしたとして、たとえ犠牲がでても罪に問われる可能性は低いだろう、だが。裁かれずとも、それによつて犠牲がでれば、それは罪なのだ。

『心の罪』。

まじうことなきそれは、自分の抱えるべき罪なのだ。

（くそがッ！犠牲がでて、自分が生き残るそんな状況になれば、一生・死ぬより辛い贖罪を抱えることになる・・・・・それに耐えられるのだろうか？ワシに・・・そんな・・死よりつらい責め苦

に耐えられるのだろうか？ならいつそ……）

どうしても、弱い考えが、船長の頭をよぎってしまった。

それはどんな屈強な者でももつ、弱さだ、鍛えようがない。（もうだす答えは・・一つしかないなのに・・でも・・）

それでも答えを躊躇した。

そのとき、窓の外の、黒い翼の少女は、船長の心を察したのか。

「大丈夫です。俺が下から支えてゆっくり降ろしますから、交差点のみんなも非難する時間は、できますよ。」

船長の脳裏に、希望が湧いた。

「絶対成功させますから、俺を信じてください」

もう怖くない。さきほどの死の選択を、迫られた船長は、彼女に選択をゆだねることで気が楽になつた。

『だがそれは嘘だ』

「わかつたそこに降ろそう・・たのむ、下から支えてバランスをとつてくれ、あとはワシがなんとかする。」

「わかりました。」

「約束する、この船の船長としての意地と、君の決意にかけて、全力を尽くすことを誓つ」

「はい」

そう力強く、船長は宣言した。

（まったく・・・今時の子供は・・・彼女の言葉は嘘だらう。ワシもだてに長いこと生きておらん、あれが嘘だとわかるくらいの、人生経験はしてきたつもりだ・・・たぶんこの子の力ではきっと、できても補助が精一杯だらう・・・もしかしたやつてみたら、補助するできないかもしれない。だがこの子はいった、絶対成功させると。ワシに勇気と希望を、与えるために、この子は選択したんだ。例え交差点に降ろすことで、被害がでようと、飛行船の乗客を助けると・・・それで被害がでればその罪をすべて自分で背負うと・・・普通

なら」(つづつ) (はず)

「交差点に降ろすか降ろさないかは船長あなたが決めてください」
つと

(命の選択という辛い役目を、ワシにやだねるはず。それが正解だ。
・ワシは大人なのだ子供背負つていい軽い罪などではない!死にかけの老人が、墓場までもつていくような重い罪だ!まったく・・・。いまどきのガキは・・・ワシもその罪・・背負う覚悟ができたぞ!)
そう思えた、それは彼女がいたからこそだ、一緒に背負つてくれる相手がいたからこそ。

(見た目は、その黒い翼で、悪魔にも見えたが・・なんてことはない、実際はその逆。)

「なああんた名前はなんだ?」

「黒羊 祭です。」

「そつかい祭ちゃん、ワシは真崎 大輔だ、あんたはワシの・・・

『天使だ』

「天使?ちがいます」

背の、黒い翼を羽ばたかせた。

「俺はただの、魔女希望者です」

そう言つと、黒い翼の天使は、コントロールルームの窓から船底に移動した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4265ba/>

魔女と僕と魔女

2012年1月13日13時45分発行